

1. 頭、頸部

- (1) 甲状腺は発生学的に 舌 より生じ、最初は管として頸部に下降する。管は閉じるが、病的に一部残存し、生後様々なきっかけで腫大することがある。これを 正中頸嚢腫 という。再発しないように摘出するためには、舌 骨を同時に切除する必要がある。
- (2) 左右の甲状腺は 気管上部 で結合する。A の位置は 気管軟骨 の 2 ないし 3 番目の位置にあり、臨床的にはこの場所で 気管 切開する。また甲状腺の裏で上下に対になって 上皮 小体が存在する。
- (3) 気管軟骨 2,3 の前にあるのは 甲状腺 の峡である。
- (4) 第 4 鰓弓から 甲状（輪状、喉頭の） 軟骨や 咽頭（喉頭） 筋が形成され、支配神経は 迷走神経 である。
- (5) 正中頸嚢腫は 甲状腺 が形成される際に起こった疾患である。
- (6) 唾液腺には 耳下腺、顎下腺、舌下腺などがある。
- (7) 頸部前方で上から 舌骨、甲状軟骨、輪状軟骨、気管の順で触れることができる。
- (8) 舌の前 2/3 は、舌体 といわれ、知覚神経は 三叉 神経が分布し、運動神経は舌下神経が分布する。
- (9) 甲状腺は 舌 で形成され、頸部腹側面を 気管 の上部まで下降する。
- (10) 鰓弓にはそれぞれ特別な神経が分布する。第一鰓弓には 三叉 神経の第三枝、第二鰓弓には 顔面 神経、これは顔面の 表情 筋に分布する。第三鰓弓には舌咽神経、第四鰓弓には典型的な副交感神経である 迷走 神経が分布する。
- (11) 舌の後ろ 1/3 を 舌根 とよび、知覚、味覚いずれにも関係する神経が 舌咽神経 である。
- (12) 第 4 鰓弓から形成される軟骨は主に 甲状軟骨 と輪状軟骨である。
- (13) 鰓弓と固有の脳神経の関係は第 1 鰓弓が 三叉 神経、第 2 鰓弓が 顔面 神経、第 3 鰓弓が 舌咽 神経、第 4 鰓弓が 迷走 神経である。
- (14) 鎖骨下静脈穿刺の時、前斜角筋の後面を走る 鎖骨下動脈 や 腕神経叢 の損傷が重大な合併症であり、内頸静脈穿刺の時は呼吸運動に重要な役割を果たす 横隔 神経の損傷が問題となる。
- (15) 胸鎖乳突筋は 総頸 動脈、内頸 静脈、迷走神経など重要な血管、神経を被う。
- (16) 舌の分界溝は舌体と 舌根 を分ける。
- (17) 胸鎖乳突筋は起始が 胸骨、鎖骨、停止が 乳様突起 である。
- (18) 第一鰓嚢から 内耳 の一部と 耳 管が形成される。

2. 胸部

- (1) 肋骨弓 costal arch は第 7 番目の肋骨から第 10 番目の肋骨で形成される。
- (2) 縦隔は 胸骨角 と第 4、第 5 胸椎の椎間円板を含んだ面で 上縦隔 と 下縦隔 とを区分する。
- (3) 内胸動脈は 前斜角 筋の内側で、鎖骨下動脈 より分岐し、胸郭の内壁に密着しつつ 上腹壁動脈 と筋横隔動脈に枝分かれする。
- (4) 中縦隔の構造で、第 2 肋間レベルに右側から 上大静脈、上行大動脈、肺動脈 が並ぶ。

- (5) 心臓を直接つむ膜が 心外膜 でこれが臓側板に相当する。この膜は大血管の起始部で離れ壁側板に移行し、漿膜性心膜 となる。これらの膜の間の空隙が 心膜腔 である。
- (6) 心膜において心臓から起始する大動脈を包む箇所を 動脈門、静脈を包む箇所を 静脈門 という。これらの間に隙間を 心膜横洞 という。
- (7) バルサルバ洞は 上行 大動脈の起始部の 3 つの膨らみで、それぞれ 左冠状動脈洞、右冠状動脈洞、無冠状動脈洞 である。
- (8) 刺激伝導系の右脚は 中隔 縁柱の表層を走行する。
- (9) 房室結節が存在する Koch の三角は 中隔尖 の付着部のライン、冠状静脈洞 開口部、Tendon of Todaro によって囲まれた領域である。
- (10) 胸膜腔の両側下端の間隙で、外側を 肋骨横隔洞 といい、レントゲンでは横隔膜外側の深い切れ込みとして認識できる。内側は浅く 肋骨縦隔洞 という。
- (11) 気管に対して後方に食道が密着しており、大動脈弓は気管に接しながら 左 主気管支を乗り越え、奇静脈は 右 主気管支を乗り越え上大静脈に入る。
- (12) 右肺の中葉は外側の B(S) 4、内側の B(S) 5 の二つの区域からなる。
- (13) 大胸筋は 起始 が鎖骨、胸骨、肋骨、腹直筋鞘で 停止 は上腕骨の大結節稜である。
- (14) 左気管支を乗り越えて背側に向かうのは上から 大動脈弓、左 肺 動脈である。
- (15) 三尖弁の 中隔尖 は心室中隔の膜性部と刺激伝導系の His 束を横切る。
- (16) 右肺中葉は二つの区域からなり、気管支は B 4 と B 5 が入る（数字を入れる）。
- (17) 縦隔の前壁を構成するのは 胸骨 で、後壁は 胸椎、下壁は 横隔膜 で、両側は 肺 仕切られ、上は胸郭上口として開いている。
- (18) 第 7、8、9、10 肋骨は結合し、肋骨 弓 を形成する。
- (19) 心臓の房室弁の中で三尖弁は、前尖、後尖、中隔尖 からなる。
- (20) 心臓の大半の静脈血を集め右心房に運ぶ静脈は 冠状静脈洞 である。
- (21) 右心室内腔において心室中隔と前乳頭筋をつなぐ肉柱は 中隔縁柱 であり、その表層を刺激伝導系の 右脚 が走る。
- (22) 心臓の部屋は 4 つあり、上大静脈が入る 右心房、肺静脈が入る 左心房、上行大動脈が出る 左心室、肺動脈がでる 右心室 である。
- (23) 肺は右が 3 葉、左が 2 葉である。気管支は正中に対し 右 A 気管支の方が 左 気管支より角度が小さい。そのため異物は A に入りやすい。
- (24) 胸部の交感神経幹から形成される神経に大、小 内蔵 神経があり、これは通常横隔膜の 脚 を貫き、腹腔に入る。
- (25) 心膜横洞の前の壁を構成する二つの血管は 上行大動脈 肺動脈 である。
- (26) 奇静脈は 右 気管支を乗り越えて、後ろから 上大 静脈に注ぐ。この部位で奇静脈の内側には 迷走 神経が走る。

- (27) 食道は心膜に包まれた 左 心房の後ろにあり、後 縦隔の構造である。
- (28) 十二指 腸の裏には、右腎臓の腎門部がある。
- (29) 気管は 食 道の前にあり、上縦隔と下縦隔の境で気管支に分岐する。
- (30) 胸骨は 胸骨柄、胸骨体、剣状突起 の3つの部分からなり、胸骨体の後ろに存在するのは主に 右 心室である。
- (31) 胸腺は 前 縦隔の構造である。
- (32) 心房中隔の発生において二次中隔は一次中隔の 右 側に形成される。心室中隔は膜性部と 筋 性部の二つの領域からなる。
- (33) 心臓を栄養する動脈の主なものは 右冠状 動脈と 左冠状 動脈である。
- (34) 正中軸に対し、右気管支の角度と左気管支の角度を比較すると 右気管支 が小さい。奇静脈は 右 気管支を乗り越えて、上 大静脈に後方から注ぐ。
- (35) 大動脈弓から 腕頭 動脈、左総頸 動脈、左鎖骨下 動脈がでる。これらの血管は胸骨柄の 上 1/2 に投影される。
- (36) 後縦隔には 食道、胸 管、胸 大動脈、奇 静脈、迷走 神経、交感神経 幹が存在する。
- (37) 左冠状動脈は二手に分かれて右、左心室の境を下行する 前下行 枝と後ろに回る 回旋 枝になる。
- (38) 大動脈弓から出る枝は右側から 腕頭 動脈、左総頸 動脈、左鎖骨下動脈である。
- (39) 房室弁で右房と右室の間にあるのは 三尖弁、左房と左室の間にあるのは 僧帽弁 である。
- (40) 呼吸器系は頭側から尾側へ大雑把に鼻腔、口腔、咽頭、喉頭、気管、気管支、肺 の順序で存在し、ガス交換を行う。
- (41) 心房中隔の形成において、右側に形成されるのは 二次 中隔、左側に形成されるのは、一次 中隔である。
- (42) 腹壁の形成で頭部ヒダから胸壁、上腹壁、横中隔 が形成される。
- (43) 大動脈弓より 腕頭動脈、左総頸動脈、左鎖骨下動脈 の3本の枝が出る。その前を横切るのが 左 腕頭静脈である。
- (44) 刺激伝導系を構成する主なものは右心房壁にある 洞房 結節、Kochの三角にある 房室 結節房室中隔を横切る His 束、中隔縁柱の表面を走行する 右脚、左室に入る左脚、肉柱の表面で細かく分岐する プルキンエ 線維である。
- (45) 大内臓神経は 胸 部の交感神経幹、節より形成され、横隔膜の 脚 を貫き、腹腔 神経節に入る。
- (46) 縦隔の前壁は 胸 骨、後壁は脊柱で12個の 胸椎、下壁は 横隔膜、両側の仕切りは胸膜で包まれた 肺、上壁はなく 胸郭 上口として開いている。
- (47) 上行大動脈から出る枝は 右冠状動脈、左冠状動脈 であり、いずれも心臓に分布する。
- (48) 心臓において動脈門と静脈門の間の隙間を 心膜横洞 という。この隙間の底部を 左冠状 動脈が走る。
- (49) 胸膜腔は 壁側 胸膜と 肺 胸膜の間の隙間で、肋骨と横隔膜の間の隙間を 肋骨横隔洞 と呼び、レントゲンでは鋭い切れ込みとして認識できる。
- (50) 後縦隔には消化管として 食道、血管として 胸大 動脈、奇 静脈があり、リンパ液を運ぶ 胸 管が存在する。神経は自律神経が存在し、迷走 神経と 交感神経 幹である。

- (51) 胸骨は上から 胸骨柄、胸骨体、剣状突起 の三つの部位に分けられる。
- (52) 心臓の刺激伝導系において Koch の三角内にあるのが 房室 結節、中隔縁柱に沿って走るのは 右 脚である。
- (53) 胸部において気管や気管分岐部に達するために 上大 静脈、上行大 動脈を左右に開けばよい。
- (54) バルサルバ洞は 右冠状 動脈洞、左冠状動脈洞、無冠状 動脈洞からなる。
- (55) 胸腺は上～前 縦隔 に存在し、大血管の前面を被う。これは発生学的に 第3 鰓嚢から形成される。
- (56) 右房に直接入る静脈は 上大静脈 である。
- (57) 第一肋骨の根元に存在する交感神経幹の神経節は 頸胸（星状）神経節 である。
- (58) 心房中隔の卵円窩は 一次 中隔と 二次 中隔の2枚の壁により形成された。
- (59) 肋骨弓を形成する肋骨は第 7 肋骨から第 10 肋骨である。
- (60) 第2鰓嚢から口蓋 扁桃、第3鰓嚢から 胸腺 と上皮小体が形成される。
- (61) 9割の人では右冠状動脈から、刺激伝導系の結節に分布する 洞房結節枝 と 房室結節枝 A を分岐する。A は右冠状動脈が後ろに回った後、後室間溝の近くである。
- (62) 主に右冠状動脈から刺激伝導系（結節）に分布する枝が出るが、そのうち後室間溝（心臓後壁、左、右心室の境界をつくる溝）の近傍で出る枝は 房室結節枝 である。
- (63) 内胸動脈は 鎖骨下 動脈より分岐し、肋 骨の近傍で胸郭の背側に接して下行し、横隔膜の近くで筋横隔動脈、上腹壁 動脈に枝分かれる。
- (64) 右心室内腔において心室中隔と前乳頭筋をつなぐ肉柱は 中隔縁柱 であり、その表層を刺激伝導系の右脚が走る。
- (65) 心臓の部屋は4つあり、上大静脈が入る 右心房、肺静脈が入る 左心房、上行大動脈が出る 左心室、肺動脈がでる 右心室 である。
- (66) 大胸筋の起始は 鎖骨、胸骨、肋骨、腹直筋鞘で、停止は 上腕骨大結節稜 である。

3. 腹部、腰部

- (1) 脾臓の頭部の裏を 下大 静脈が走り、頸部の裏を 門脈 が走る。
- (2) 胆汁の流れは、毛細 胆管から始まり ヘリング 管、グリソン鞘に存在する 小葉間 胆管を経て肝管、総胆管となり、十二指腸の 下行部（大十二指腸乳頭） に開口する。
- (3) 消化管は口腔から始まり、食道、横隔膜を貫き 胃 となり、十二指腸に移行しさらに 空 腸、回腸、盲腸、虫垂、上行 結腸、横行結腸、下行 結腸、S状 結腸、直腸、肛門と続く。
- (4) 結腸を小腸から区別する構造には 腹膜 垂、結腸ヒモ があり、A は 縦走 筋が発達したものである。
- (5) 肝臓は 右葉 と 左葉 からなり、その境をカントリーラインという。このラインは 胆嚢窩 と 下大 静脈を結んだものである。
- (6) 消化器に分布する主な動脈は腹大動脈の前面から出る。上から 腹腔 動脈、上腸間膜 動脈、下腸間膜 動脈である。A は 脾臓 の上縁にあり、左胃動脈、脾 動脈、総肝 動脈の3本の枝を出す。

- (7) 肝臓は 胆嚢窩 と 下大 静脈を結ぶ カントリー ラインで分ける。このラインと重なるのは 中 肝静脈である。
- (8) 腰神経叢で L5 の横突起の近くを通る神経は 大腿 神経、腰仙骨神経幹（ 分岐 神経ともいう）、閉鎖 神経である。
- (9) 右副腎は 下大 静脈に密接して存在する。
- (10) 網嚢孔の前壁は 門 脈で、後壁には 下大 静脈があり、上壁は肝臓、下壁は 十二指 腸である。
- (11) 胃の入り口は 噴 門、出口は 幽 門である。大きく底部、体部、幽門部の3箇所に分ける。胃の 小 弯と肝臓をつなぎ間膜を 小網 と呼ぶ。これは発生学的には 前胃 間膜である。
- (12) 腸管の独特な配置は発生の過程で 上腸間膜 動脈を回転軸として、反時計 回りに 270 度回転して固定された結果である。
- (13) 小腸は十二指腸、空 腸、回 腸からなる。
- (14) 腹腔において前腸から形成されるのは胃、十二指腸の一部、肝臓、膵臓 などである。
- (15) 腰神経叢の中で大腰筋の内側を走るのが 閉鎖 神経、貫くのが陰部大腿神経、外側面を走り大腿の伸筋に分布するのは 大腿 神経である。
- (16) 網嚢孔の前壁を形成しているのは 肝十二指腸 靱帯（間膜）でその中には 門脈、固有肝動脈、総胆管が含まれる。3つの管のうち前から見て一番後ろにあるのは 門脈 である。
- (17) 腎臓の後ろに存在する筋は 腰方形筋 で、内側にある筋は 大腰筋 である。
- (18) 食道から胃に入る場所を 噴門 という。十二指腸に出る部位を 幽門 といい、輪状 筋が著しく発達している。
- (19) 胃の後方に 網嚢 という空間があり、その後壁にアミラーゼなどを分泌する 膵臓 がある。
- (20) 横隔膜は 呼吸 筋で、胸骨部、腹 部、腰部から構成され、上面には臍中心の上に 心嚢、下面には肝臓があり、支配神経は 横隔神経 である。
- (21) 食道背側間膜は発生の過程を経て横隔膜の 脚 になる。また横隔膜を支配する主な神経は、横隔 神経である。
- (22) 動脈裂孔は横隔膜の 脚 により形成され、大動脈以外に胸管、奇 静脈などが通る。
- (23) Cantlie line は 胆嚢 窩と 下大 静脈を結ぶ線であり、肝臓を 右葉 と 左葉 に分ける。
- (24) 総肝動脈は 固有肝 動脈と、胃十二指 腸動脈にわかれる。
- (25) Transpyloric plane は第 1 腰椎と第 2 腰椎の間を通る面で、脾臓 の下端はこの面で終わる。
- (26) 左腎臓の腹側に 膵臓 の尾部があり、前面下部に 左結腸曲（下行結腸上部） があり、上方に 脾臓 が近接する。
- (27) 上腸間膜 動脈は空腸動脈や回腸動脈の本幹で、膵臓 の体部の裏で、腹大動脈より起始し、右側を、脾 静脈が走る。
- (28) 腹部内臓に分布する副交感神経は横行結腸右 2/3 までが、迷走 神経、それ以下は、骨盤内臓 神経である。
- (29) 腰方形筋は第 12 肋骨と腸骨稜の間に張り、その前には 腎 臓が存在する。

- (30) 膵臓の頭部の後ろには 下大 静脈、頸部の裏には 門脈、体部の後ろには 上腸間膜 動脈、尾部の後ろには 左腎臓 が存在する。
- (31) 食道と胃との境で左側に切れ込みが形成される。これを 噴門切痕 あるいは His 角という。
- (32) 肝臓は 8 区域に分けられる。第一区域は 尾状 葉である。
- (33) 腹腔動脈の主な枝は次の3本である。総肝 動脈、左胃動脈、脾 動脈。
- (34) 網嚢孔の前壁を形成しているのは 肝十二指腸 靱帯（間膜）である。
- (35) Transpyloric plane は 胸骨柄 上縁と 恥骨 結合の上縁を結ぶ線の中点を含む水平面で、この面の上下数 cm の間に 膵臓、腎臓 などの腹膜後器官の多くが存在する。
- (36) 消化管の形成において腹側間膜は 小 網となり、背側間膜は 大 網と腸間膜などになる。
- (37) 膵臓は 腹腔 動脈と上腸間膜動脈の支配を受ける。
- (38) 上行結腸の上部（右結腸曲）には 十二指腸 が近接し、その裏には腎臓がある。
- (39) 大腸を他の消化管から区別する構造として 結腸ヒモ、虫垂 などがある。
- (40) 胃の入り口は 噴門、出口は 幽門 である。特に輪走筋が発達しているのは 幽門 である。
- (41) Cantlie line は 胆嚢窩 と 下大 静脈を結ぶ線であり、肝臓を左右に分ける。
- (42) 横隔膜は筋肉で、横中隔由来の 腱 中心に停止する。
- (43) 腎臓をつつむ結合組織の膜は ゲロタ筋膜 であり、膵臓と後腹壁、上、下結腸と後腹壁を境する結合組織の膜は 癒合筋膜 である。
- (44) 肝臓は門脈の分布により 8 区域に分けられるが、そのうち第1区域は 尾状 葉、第4区域は 方形 葉である。
- (45) 十二指腸下行部の背側にあるのが 右 腎臓であり、下大静脈の腹側に存在するのは、膵臓の 頭部 である。
- (46) 門脈の右枝は肝臓右 前 区域と右 後 区域に分布する。
- (47) 虫垂動脈は 回結腸 動脈より分岐し、虫垂 間膜を通り、虫垂に分布する。
- (48) 腎臓の背側面に 横隔膜、大腰 筋、腰方形 筋、腹横筋などの筋がある。
- (49) 肝管と胆嚢管と合流した後の管を 総胆管 といい、十二指腸、膵臓の背側面を下行した後、脾 管と合流し、十二指腸下行部内の 大十二指腸乳頭 に開く。
- (50) 横行結腸間膜は 膵臓（体尾部） と 十二指腸 の下行部につく。
- (51) 腰神経叢の枝に内転筋に分布する 閉鎖 神経と伸筋に分布する 大腿 神経などがある。
- (52) 胃の背側にある空間は 網嚢 であり、その後壁には消化酵素やホルモンなどを分泌する 膵臓 が存在する。
- (53) 腰神経叢は 大腰 筋に覆われており、その主な枝は大腿前面に分布する 大腿 神経、内転筋に分布する 閉鎖 神経などである。
- (54) 間膜を持つ結腸は 横行 結腸と S状 結腸であり、前者の右2/3は迷走神経支配である。

- (55) Gerota's fascia が包むものに、尿を生成する 腎臓、ステロイドホルモンを分泌する 副腎 がある。
- (56) 肝臓は 8 区域、左肺は 9 区域に分けられる。
- (57) 肝臓で右後区域と右前区域を分けるのは 右肝 静脈である。
- (58) 腹膜鞘状突起は発生の過程で閉鎖し 精巣 鞘膜になる。
- (59) 消化管は口腔から始まり、食道、横隔膜を貫き 胃 となり、十二指腸に移行しさらに 空 腸、回腸、盲腸、虫垂、上行 結腸、横行結腸、下行 結腸、S 状 結腸、直腸、肛門と続く。
- (60) 十二指腸下行部の腹側にあるのが 右 腎臓であり、下大静脈の腹側に存在するのは、膵臓の 頭部 である。
- (61) 膵臓の上縁を脾臓に向かって走行するのが、脾 動脈で、膵臓の頭部と頸部の境を下行し、上膵十二指腸動脈と左胃大網動脈に分かれる枝は 胃十二指腸 動脈であり、その本幹は 腹腔 動脈である。
- (62) 食道の上 1/2 の腹側に 気管、下 1/2 の腹側に心嚢を介して 左心房 がある。
- (63) 大腸と小腸を区別するものに、結腸 膨起、結腸 ヒモ、腹膜 垂がある。A は 虫垂（の基部） ではじまり、S 状結腸が直腸に移行する部位で終わる。
- (64) 横隔膜は 呼吸 筋で、胸骨部、腹 部、腰部から構成され、上面には腱中心の上に 心嚢、下面には肝臓があり、支配神経は 横隔 神経である。
- (65) 胎生期における初期の消化管は、前 腸、中 腸、後 腸に区分され、A から肝臓や膵臓、B から膀胱なども形成される。
- (66) 胃の幽門部は、解剖学的に 幽門洞、幽門管 から成る。
- (67) 大十二指腸乳頭は十二指腸の 下行 部に存在する。
- (68) 上行結腸の上部（右結腸曲）は 十二指腸 が近接し、その背側に 右腎臓 がある。
- (69) 消化器に分布する血管のうちで腹膜腔内の臓器に分布する動脈は 腹腔 動脈、上腸間膜 動脈、下腸間膜 動脈である。
- (70) 腰神経叢の中で第 5 腰椎の横突起の近くには分岐神経、大腿伸側に向かう 大腿 神経、内転筋に分布する 閉鎖 神経がある。
- (71) 横隔膜が正中弓状靭帯を通過する主な構造は、大動脈、リンパ液が流れる 胸 管、最後に上大静脈に流れ込む 奇静脈 である。

4. 骨盤

- (1) 骨盤下口は 尿生殖隔膜 と 骨盤隔膜 で閉鎖されている。
- (2) 卵巣を子宮に固定している構造は 固有卵巣 索、卵巣間 膜であり、骨盤壁に固定している構造は 卵巣提索 である。
- (3) Denonvilliers 筋膜は 直腸 の下端と 会陰腱 中心をつなぐ 癒合 筋膜である。
- (4) 骨盤下口は 尿生殖 隔膜、骨盤 隔膜で閉鎖されている。A は前 1/2 を覆い、B の側面の起始は 内 閉鎖筋である。
- (5) 泌尿器系は腎臓、尿管、膀胱、尿道である。A は男性の場合 精管 と交叉し、女性では 子宮頸 の外側面を横切る。B は男性の場合、下部に 前立 腺があり、女性では後方に 子宮、膣の一部が密着する。

- (6) 精巣は 陰嚢 に納まっており、精管は 単径 管を経て、骨盤内に入り、尿管 と交叉したあと、前立腺 を貫き尿道に開口する。
- (7) 男性骨盤において膀胱を覆った腹膜は 骨盤隔膜 の部位で反転して直腸へ移行する。女性の場合は膀胱を覆った腹膜は最初に 子宮（体、頭部） を、次に、後 膣門蓋を覆い、直腸に移行する。
- (8) 子宮と直腸との間の空間を、直腸子宮 窩という。臨床ではこれを ダグラス 窩という。
- (9) 卵巣の後内側を 尿管、上外側を 外腸骨 動脈、下後外側を 閉鎖 神経が通る。
- (10) 右卵巣は 虫垂 に近い。
- (11) 子宮の基靭帯は子宮を固定する装置であるが、同時に 腹膜 が折れかえる部位、子宮 動脈が子宮に侵入し、尿管 が子宮を横切る場所でもある。
- (12) 男性の生殖腺は 精 巣、女性は 卵 巣である。
- (13) 骨盤において、後膣門蓋が直接接する空間は ダグラス 窩である。
- (14) 寛骨は、腸 骨、坐 骨、恥 骨の3つの骨が癒合したものである。
- (15) 男性の場合、膀胱の後ろにあるのは 前立腺 で、女性の場合は 子宮 である。
- (16) 膣において、ダグラス窩に直接接するのは 後膣門蓋 である。
- (17) 陰部神経管は 内閉鎖 筋に筋膜で形成され、陰部 神経と 内陰部 動脈を含む。
- (18) 卵巣は骨盤壁に卵巣 間膜 で固定され、その中を卵巣に分布する 卵巣動脈 が通る。また子宮に 卵巣提索 で固定される。
- (19) 上前腸骨棘と鼠径靭帯の囲む領域を 単径 部という。
- (20) 鼠径管には男性では 精索、女性では 子宮円索 が存在する。
- (21) 鼠径管内に 内臓 が脱出するものを、外鼠径ヘルニアといい、その嚢に腸管などが入り込むことがある。
- (22) 子宮を固定しているのは 基 靭帯、固有 卵巣索 などである。
- (23) 子宮動脈は 内腸骨 動脈の枝であり、卵巣動脈は 腹大動脈 から直接分岐する。
- (24) 右卵巣について、その下方を 尿管 が通り、その右上方に 虫垂 がある。A はよく炎症を起こし、女性の場合、卵巣炎との鑑別が問題になる。
- (25) 子宮、卵管、膣の形成は両側の 中腎傍 管の融合から始まる。下端は膀胱の背側下方にある膀胱由来の膣洞球に結合し、両者があわさって膣を形成する。したがって膣に 尿管 が開口するような奇形が生じる。
- (26) ダグラス窩と直接するのは 後膣 門蓋である。
- (27) 乳児が号泣した後、鼠径部が膨れてきた。圧迫するとぐずぐずと音がして戻った。この病気は先天性鼠径 ヘルニア といわれ、腹膜鞘状突起 が閉じずに残り、その中に腸管が飛び出して膨れたのである。
- (28) 寛骨は腸骨、坐骨、恥骨が結合したものである。
- (29) 精管は 尿管 と交叉し、膀胱の裏側に入り、かつ 前立腺 を貫き尿道に開口する。
- (30) 子宮を骨盤腔に固定する装置で、子宮広間膜の基部に存在し、尿管や 子宮動脈 の通過路になっているのが 基 靭帯である。

- (31) 仙骨神経叢は 梨状 筋の表面に存在し、その下縁を通り骨盤外に出る。主な枝は上殿神経、下殿神経、坐骨 神経、陰部 神経である。
- (32) 女性の直腸と子宮とのスペースは男性に比べ深く、広く、直腸子宮窩、臨床では ダグラス 窩という。
- (33) 泌尿器系は 腎臓、尿管、膀胱 尿道からなる。

5. その他

- (1) 胸部内臓を支配する副交感神経は 迷走 神経骨盤内臓を支配するのは 骨盤内臓 神経である。
- (2) 開腹して見た場合、腰神経叢は 大腰 筋の裏に、仙骨神経叢は 梨状 筋の表に存在する。
- (3) 脊柱は構成する7個の頸椎、12 個の胸椎、5 の腰椎、1個の仙骨、1個の尾骨からなる。
- (4) 前腕を構成する骨は 橈 骨と 尺 骨の2本である。
- (5) 下大静脈に接して存在する内分泌器官は右 副腎、頸部、気管の前、側面にあるのが、甲状腺 である。
- (6) 内分泌器系には頭蓋のトルコ鞍に存在する 下垂体、頸部気管の前に 甲状腺、腎臓上極に近接して、副腎 がある。
- (7) 上腕骨が上腕にあり、橈骨、尺骨が前腕にある。
- (8) 前腕で掌を前にした時、親指側にあるのが 橈骨、小指側にあるのが 尺骨 である。
- (9) 中枢神経はそれぞれの部位で髄液を入れる空間と対応する。大脳は側脳室、間脳 は第3脳室、中脳は中脳 水道、小脳は 第4脳室、延髄は第 第4 脳室、脊髄は中心管である。
- (10) 中枢神経は髄液を入れている空間と対応して存在する。例えば大脳は 側脳室、間脳は第三脳室、中脳は 中脳水道、小脳、橋、延髄は 第4脳室 である。
- (11) 耳の付け根で拍動を触れる動脈は浅 側頭 動脈である。
- (12) 大腿骨と脛骨の間に 膝 関節が形成される。関節腔を裏打ちしているのは 滑膜 であり、摩擦軽減に関与する液体の分泌に関与する細胞などにより構成される。
- (13) 硬膜外麻酔を行う際、挿入した針は棘上靭帯、棘間靭帯を通り、やや抵抗のある 黄色 靭帯を通ると急に抵抗がなくなり、液体の注入が容易になる。この場所が 硬膜 外腔である。脂肪 が豊富で出血しやすい。
- (14) 発生過程における三胚葉構造とは神経や皮膚に分化する 外胚葉、心臓や腎臓に分化する 中胚葉、消化器や呼吸器に分化する 内胚葉 である。
- (15) 硬膜外麻酔を行う際、硬膜外腔に達するまで脊柱に関わる次の構造を通過する。棘上 靭帯 → 棘間靭帯 → 黄色 靭帯。Aは弾性線維を多く含み独特な色調を呈する。
- (16) 骨を曲げるために働く筋を 屈筋、伸ばすための筋を 伸筋、体肢を体幹に近づける働きをするものを 回内筋、体幹から遠ざける筋を 回外筋 という。
- (17) 骨格筋は一般に 腱 を介して二つの骨につく。その際、動きの少ない骨についている部位を 起始、動く方についている部位を 停止 という。
- (18) 胎生期における脊索は神経管の誘導に重要な役割を果たすが、成人の身体にも椎間円板の中央に 髄核 として残る。

- (19) 第三鰓嚢から形成される器官は 上皮小体 と 胸腺 であり、そのうち A は前縦隔に存在する。
- (20) 椎骨は主に椎体、椎弓、後方に飛び出た 棘 突起、上下の 関節 突起からなる。
- (21) 脊髄を硬膜に固定する構造は 歯状 靱帯である。
- (22) 脊髄神経は頸神経が 8 対、胸神経が 12 対、腰神経が 5 対である。
- (23) 脊髄神経には筋を動かす 運動神経 と痛みなどを感知する 感覚神経 がある。
- (24) 静脈には動脈と一しょに走る 伴行静脈 と動脈を伴わない 皮静脈 とがある。
- (25) 外胚葉、内胚葉、中胚葉を 三 胚葉と呼び、すべて 胚盤葉 由来である。
- (26) 体壁の形成において、頭部ヒダから胸壁、上腹壁、横中隔 が形成され、尾部ヒダからは 膀胱 にくみこまれる尿膜、下腹壁、両側ヒダから左右の側腹壁が形成される。